

## 本朝沙門 日蓮撰

摩訶止観第五に云はく、

「夫一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば百法界に即ち三千種の世間を具す。世間と如是と一なり。開合の異なり。此の三千、一念の心に在り。若し心無くんば已みなん。介爾も心有れば即ち三千を具す。乃至所以に称して不可思議境と為す意此に在り」等云云。或本に云はく「一界に三種の世間を具す」と。

問うて曰く、玄義に一念三千の名目を明かすや。答へて曰く、妙楽云はく「明かさず」と。問うて曰く、文句に一念三千の名目を明かすや。答へて曰く、妙楽云はく「明かさず」と。問うて曰く、其の妙楽の釈如何。答へて曰く、「並びに未だ一念三千と云はず」等云云。問うて曰く、止観の一二三四等に一念三千の名目を明かすや。答へて曰く、之無し、問うて曰く、其の証如何。答へて曰く、妙楽云はく「故に止観の正しく観法を明かすに至って並びに三千を以て指南と為す」等云云。疑って云はく、玄義の第二に云はく「又一法界に九法界を具すれば百法界に千如是」等云云。文句第一に云はく「一入に十法界を具すれば一界又十界なり、十界各十如是あれば即ち是一千」等云云。観音玄に云はく「十法界交互なれば即ち百法界有り、千種の性相、冥伏して心に在り、現前せずと雖も宛然として具足す」等云云。問うて曰はく、止観の前の四に一念三千の名目を明かすや。答へて曰く、妙楽云はく「明かさず」と。問うて曰はく、其の釈如何。答ふ、弘決第五に云はく「若し正観に望めば全く未だ行を論ぜず。亦二十五法に歴て事に約して解を生ず、方に能く正修の方便と為すに堪へたり、是の故に前の六をば皆解に属す」等云云。又云はく「故に止観の正しく観法を明かすに至って、並びに三千を以て指南と為す、乃ち是終窮究竟の極説なり。故に序の中に、説己心中所行法門と云ふ、良に以有るなり。請ふ、尋ね読まん者心に異縁無かれ」等云云。

夫智者の弘法三十年。二十九年の間は玄文等の諸義を説いて、五時・八教・百界・千如を明かし、前五百余年の間の諸非を責め、並びに天竺の論師の未だ述べざるを顕はす。章安大師云はく「天竺の大論尚其の類に非ず、震旦の人師何ぞ勞はしく語るに及ばん。此誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云。墓無いかな天台の末学等、華嚴・真言の元祖の盗人に一念三千の重宝を盗み取られて還って彼等が門家と成りぬ。章安大師兼ねて此の事を知って歎いて言はく「斯の言若し墜ちなば将来悲しむべし」云云。

問うて曰く、百界千如と一念三千と差別如何。答へて曰く、百界千如は有情界に限り、一念三千は情非情に亘る。不審して云はく、非情に十如是亘らば草木に心有って有情の如く成仏を為すべきや如何。答へて曰く、此の事難信難解なり。天台の難信難解に二有り、一には教門の難信難解、二には観門の難信難解なり。其の教門の難信難解とは、

一仏の所説しよせつに於て爾前にぜんの諸經にじょうには、二乘せんたい・闡提せんたいは未來にじょうに永く成仏せず、教主せんたい釈尊せんたいは始めて正覺しよがくを成ず、法華經迹本二門しよがくに來至して彼の二説やぶを壞る、一仏二言これ水火なり、誰人か之を信ぜん。此は教門の難信難解なり。觀門の難信難解とは百界千如一念三千にして、非情の上の色心の二法の十如是是なり。爾りと雖も木画の二像に於ては、外典内典共に之を許して本尊と為す、其の義に於ては天台一家より出でたれども、草木の上に色心の因果を置かずんば、木画の像を本尊たのに恃たてまつみ奉ること無益なり。疑つて云はく、草木国土の上の十如是の因果の二法は何れの文に出でたるや。答へて曰く、止觀第五に云はく「国土世間また亦十種の法を具す。所以惡国土、相・性・体・力」等云云。釈籤第六に云はく「相は唯色に在り、性は唯心ただしんに在り、体・力・作・縁は義色心ぎしきしんを兼ね、因果は唯心、報は唯色に在り」等云云。金錘論に云はく「乃ち是一草・一木・一礫・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了えんりょうを具足す」等云云。

問うて曰く、出處しゆつしよすで既に之を聞く、觀心の心如何。答へて曰く、觀心とは我が己心を觀じて十法界を見る、是を觀心と云ふなり。譬へば他人の六根ろっこんを見ると雖も、未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず、明鏡みやうきやうに向かふの時始めて自具の六根を見るが如し。設たとひ諸經の中に所々に六道並びに四聖を載すと雖も、法華經並びに天台大師所述の摩訶止觀等の明鏡を見ざれば自具の十界・百界千如・一念三千を知らざるなり。

問うて曰く、法華經は何れの文ぞ、天台の釈いは如何。答へて曰く、法華經第一方便品に云はく「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云。是は九界所具の仏界なり。壽量品に云はく「是くの如く我成仏してより已來甚だ大いに久遠なり、壽命、無量阿僧祇劫、常住にして滅せず、諸の善男子、我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命なほ今猶未だ尽きず、復上の數に倍せり」等云云。此の經文は仏界所具の九界なり。經に云はく「提婆達多、乃至天王如來」等云云。地獄界所具の仏界なり。經に云はく「一を藍婆と名づけ、乃至汝等但能く法華の名を護持する者は福量はかるべからず」等云云。是餓鬼界所具の十界なり。經に云はく「竜女、乃至成等正覺」等云云。此畜生界所具の十界なり。經に云はく「婆稚阿修羅王、乃至一偈一句を聞いて、阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等云云。修羅界所具の十界なり。經に云はく「若し人仏の為の故に、乃至皆已に仏道を成ず」等云云。此人界所具の十界なり。經に云はく「大梵天王、乃至我等も亦是くの如く、必ず當に作仏することを得べし」等云云。此天界所具の十界なり。經に云はく「舍利弗、乃至華光如來」等云云。此聲聞界所具の十界なり。經に云はく「其の縁覺を求むる者・比丘・比丘尼、乃至合掌し敬心を以て具足の道を聞かんと欲す」等云云。此即ち縁覺界所具の十界なり。經に云はく「地涌千界、乃至真淨大法」等云云。此即ち菩薩界所具の十界なり。經に云はく「或説己身或説他身」等云云。即ち仏界所具の十界なり。

問うて曰く、自他面の六根は共に之を見る、彼此の十界に於ては未だ之を見ず、如何が之を信ぜん。答へて曰く、法華經法師品に云はく「難信難解」と。寶塔品に云はく「六難九易」等云云。天台大師云はく「二門ことごと悉く昔と反すれば難信難解なり」と。章

安大師云はく「仏此を將て大事と為す、何ぞ解し易きことを得べけんや」等云云。伝教大師云はく「此の法華經は最も為れ難信難解なり、隨自意の故に」等云云。夫在世の正機は過去の宿習厚き上、教主釈尊・多宝仏・十方分身の諸仏、地涌千界・文殊・弥勒等之を扶けて諫曉せしむるに猶信ぜざる者之有り、五千席を去り人天移さる、況んや正像をや、何に況んや末法の初めをや。汝之を信ぜば正法に非じ。

問うて曰く、經文並びに天台・章安等の解説は疑網なし、但し火を以て水と云ひ墨を以て白しと云ふ、設ひ仏説たりと雖も信を取り難し。今數他面を見るに但人界に限って余界を見ず、自面も亦復是くの如し。如何が信心を立てんや。答ふ、數他面を見るに、或時は喜び、或時は瞋り、或時は平らかに、或時は貪り現じ、或時は癡か現じ、或時は諂曲なり。瞋るは地獄、貧るは餓鬼、癡かは畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平らかなるは人なり。他面の色法に於ては六道共に之有り、四聖は冥伏して現はれざれども委細に之を尋ねれば之有るべし。

問うて曰く、六道に於て分明ならずと雖も、粗之を聞くに之を備ふるに似たり。四聖は全く見えざるは如何。答へて曰く、前には人界の六道之を疑ふ、然りと雖も強ひて之を言つて相似の言を出だせしなり、四聖も又爾るべきか。試みに道理を添加して万が一之を宣べん。所以世間の無常は眼前に有り、豈人界に二乗界無からんや。無顧の悪人も猶妻子を慈愛す、菩薩界の一分なり。但仏界計り現じ難し、九界を具するを以て強ひて之を信じ、疑惑せしむること勿れ。法華經の文に人界を説いて云はく「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」と。涅槃經に云はく「大乘を学する者は肉眼有り」と雖も名づけて仏眼と為す」等云云。末代の凡夫出生して法華經を信ずるは人界に仏界を具する故なり。

問うて曰く、十界互具の仏語分明なり。然りと雖も我等が劣心に仏法界を具すること信を取り難き者なり。今の時之を信ぜずば必ず一闡提と成らん。願はくは大慈悲を起こして之を信ぜしめ阿鼻の苦を救護したまへ。答へて曰く、汝既に唯一大事因縁の經文を見聞して之を信ぜざれば、釈尊より已下の四依の菩薩並びに末代理即の我等、如何が汝が不信を救護せんや。然りと雖も試みに之を言はん、仏に値ひたてまつりて覺らざる者、阿難等の辺にして得道する者之有ればなり。其れ機に二有り。一には仏を見たてまつりて法華にして得道す、二には仏を見たてまつらざれども法華にて得道するなり。其の上伝教已前は漢土の道士・月支の外道は、儒教・四韋陀等を以て縁と為して正見に入る者之有り。又利根の菩薩凡夫等の、華嚴・方等・般若等の諸大乘經を聞きし縁を以て大通久遠の下種を顕示する者多々なり。例せば独覺の飛花落葉の如し、教外の得道是なり。過去の下種結縁無き者の権小に執着する者は、設ひ法華經に値ひ奉れども小権の見を出でず。自見を以て正義と為るが故に、還つて法華經を以て或は小乘經に同じ、或は華嚴・大日經等に同じ、或は之を下す。此等の諸師は儒家・外道の賢聖より劣れる者なり。此等は且く之を置く。十界互具之を立つるは石中の火、木中の花、信

じ難けれども縁に値ひて出生すれば之を信ず。人界所具の仏界は水中の火、火中の水、最も甚だ信じ難し。然りと雖も竜火は水より出で竜水は火より生ず、心得られざれども現証有れば之を用ゆ。既に人界の八界之を信ず、仏界何ぞ之を用ひざらん。堯舜等の聖人の如きは万民に於て偏頗無し、人界の仏界の一分なり。不輕菩薩は所見の人に於て仏身を見る、悉達太子は人界より仏身を成ず、此等の現証を以て之を信ずべきなり。

問うて曰く、教主釈尊は此より堅固に之を秘す三惑已断の仏なり、又十方世界の国主・一切の菩薩・二乗・人天等の主君なり。行の時は梵天左に在り帝釈右に侍り、四衆八部後に聳ひ金剛前に導き、八万法蔵を演説して一切衆生を得脱せしむ。是くの如き仏陀何を以て我等凡夫の己心に住せしめんや。又迹門爾前の意を以て之を論ずれば、教主釈尊は始成正覚の仏なり。過去の因行を尋ね求むれば、或は能施太子、或は儒童菩薩、或は尸毘王、或は薩埵王子、或は三祇・百劫、或は動踰塵劫、或は無量阿僧祇劫、或は初発心時、或は三千塵点等の間、七万五千・六千・七千等の仏を供養し、劫を積み行満じて今の教主釈尊と成りたまふ。是くの如き因位の諸行は皆我等が己心所具の菩薩界の功德か。果位を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覚の仏、四十余年の間四教の色身を示現し、爾前・迹門・涅槃経等を演説して一切衆生を利益したまふ。所謂華蔵の時、十方台上の盧舎那、阿含経の三十四心、断結成道の仏、方等・般若の千仏等、大日・金剛頂等の千二百余尊、並びに迹門宝塔品の四土色身、涅槃経の或は丈六と見る、或は小身大身と現じ、或は盧舎那と見る、或は身虚空に同じと見る。四種の身、乃至、八十御入滅には舍利を留めて正像末を利益したまふ。本門を以て之を疑はゞ、教主釈尊は五百塵点已前の仏なり、因位も又是くの如し。其れより已来十方世界に分身し、一代聖教を演説して塵数の衆生を教化したまふ。本門の所化を以て迹門の所化に比較すれば、一滄と大海と一塵と大山となり。本門の一菩薩を迹門の十方世界の文殊・観音等に対向すれば、猴猿を以て帝釈に比するに尚及ばず。其の外十方世界の断惑証果の二乗並びに梵天・帝釈・日月・四天・四輪王、乃至無間大城の大火炎等、此等は皆我が一念の十界か、己心の三千か、仏説たりと雖も之を信ずべからず。

此を以て之を思ふに、爾前の諸経は実事なり実語なり。華蔵経に云はく「究竟して虚妄を離れ染無きこと虚空の如し」と。仁王経に云はく「源を窮め性を尽くして妙智存せり」と。金剛般若経に云はく「清浄の善のみ有り」と。馬鳴菩薩の起信論に云はく「如来蔵の中に清浄の功德のみ有り」と。天親菩薩の唯識論に云はく「謂はく、余の有漏と劣の無漏と種は、金剛喻定が現在前する時、極円明の純浄の本識を引く。彼の依に非ざるが故に皆永く棄捨す」等云云。爾前の経々と法華経と之を校量するに彼の経々は無数なり時説既に長し、一仏の二言ならば彼に付くべし。馬鳴菩薩は付法蔵の第十一、仏記に之有り。天親は千部の論師、四依の大士なり。天台大師は辺鄙の小僧にして一論をも宣べず、誰か之を信ぜん。其の上多を捨て小に付くとも法華経の文分明

ならば少し恃怙有らんも、法華經の文に何れの所にか十界互具・百界千如・一念三千の分明なる証文之有りや。随って經文を開拓するに「諸法の中の悪を断じたまへり」等云云。天親菩薩の法華論にも、堅慧菩薩の宝性論にも十界互具之無く、漢土南北の諸大人師・日本七寺の末師の中にも此の義無し。但天台一人の僻見なり、伝教一人の謬伝なり。故に清涼国師の云はく「天台の謬りなり」と。慧苑法師の云はく「然るに天台は小乗を呼んで三蔵教と為し其の名謬濫するを以て」等云云。了洪が云はく「天台独り未だ華嚴の意を尽くさず」等云云。得一が云はく「咄いかな智公、汝は是誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て覆面舌の所説の教時を謗ず」等云云。弘法大師の云はく「震旦の人師等争って醍醐を盗んで各自宗に名づく」等云云。夫一念三千の法門は一代の権実に名目を削り、四依の諸論師其の義を載せず、漢土日域の人師も之を用ひず。如何が之を信ぜん。

答へて曰く、此の難最も甚だし最も甚だし、但し諸經と法華との相違は經文より事起こりて分明なり。未顕と已顕と、証明と舌相と、二乗の成不と、始成と久成等之を顕はす。諸論師の事、天台大師云はく「天親・竜樹、内鑑冷然たり、外には時の宜しきに適ひ各権に拠る所あり。而るに人師偏に解し、学者苟しくも執し、遂に矢石を興し各一辺を保ちて大いに聖道に乖けり」等云云。章安大師云はく「天竺の大論すら尚其の類に非ず、真旦の人師何ぞ勞はしく語るに及ばん、此誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云。天親・竜樹・馬鳴・堅慧等は内鑑冷然なり。然りと雖も時未だ至らざるが故に之を宣べざるか。人師に於ては天台已前は或は珠を含み或は一向に之を知らず。已後の人師は或は初めに之を破して後に帰伏する人有り、或は一向に用ひざる者も之有り。但し「諸法の中の悪を断じたまへり」の經文を会すべきなり。彼は法華經に爾前を載せたる經文なり。往いて之を見るに、經文分明に十界互具之を説く。所謂「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云。天台此の經文を承けて云はく「若し衆生に仏の知見無くんば何ぞ開を論ずる所あらん。当に知るべし、仏の知見衆生に纏在することを」云云。章安大師の云はく「衆生に若し仏の知見無くんば何ぞ開悟する所あらん。若し貧女に蔵無くんば何ぞ示す所あらんや」等云云。

但し会し難き所は上の教主釈尊等の大難なり。此の事を仏遮会して云はく「已今当説、最為難信難解」と。次下の六難九易是なり。天台大師云はく「二門悉く昔と反すれば信じ難く解し難し。鋒に当たるの難事なり」と。章安大師の云はく「仏此を將て大事と為す、何ぞ解し易きことを得べけんや」と。伝教大師云はく「此の法華經は最もこれ難信難解なり、随自意の故に」等云云。夫仏より滅後一千八百余年に至るまで、三国に経歴して但三人のみ有りて始めて此の正法を覚知せり。所謂月支の釈尊、真旦の智者大師、日域の伝教此の三人は内典の聖人なり。問うて曰く、竜樹・天親等は如何。答へて曰く、此等の聖人は知って之を言はざる仁なり。或は迹門の一分之を宣べて本門と觀心とを云はず、或は機有って時無きか、或は機と時と共に之無きか。天台・伝教已後は

之を知る者多々なり、二聖の智を用ゆるが故なり。所謂三論の嘉祥、南三北七の百余人、華嚴宗の法蔵・清涼等、法相宗の玄奘三蔵・慈恩大師等、真言宗の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等、律宗の道宣等初めには反逆を存し、後には一向に帰伏せしなり。

但し初めの難を遮せば、無量義經に云はく「譬へば国王と夫人と新たに王子を生ぜん。若しは一日若しは二日若しは七日に至り、若しは一月若しは二月若しは七月に至り、若しは一歳若しは二歳若しは七歳に至り、復国事を領理すること能はずと雖も、已に臣民に宗敬せられ諸の大王の子を以て伴侶と為ん。王及び夫人の愛心偏に重くして常に与みし共に語らん。所以は何、稚小なるを以ての故にといはんが如く、善男子是の持經者も亦復是くの如し。諸仏の国王と是の經の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生ず、若し菩薩是の經を聞くことを得て、若しは一句若しは一偈、若しは一転若しは二転、若しは十若しは百、若しは千若しは万、若しは億万恒河沙無量無数転せば、復真理の極を体すること能はずと雖も、乃至已に一切の四衆八部に宗み仰がれ、諸の大菩薩を以て眷屬と為ん、乃至常に諸仏に護念せられ慈愛偏に覆はれん。新学なるを以ての故に」等云云。普賢經に云はく「此の大乗經典は諸仏の宝蔵十方三世の諸仏の眼目なり、乃至三世の諸の如来を出生する種なり、乃至汝大乘を行じて仏種を断ぜざれ」等云云。又云はく「此の方等經は是諸仏の眼なり、諸仏は因って五眼を具することを得、仏の三種の身は方等より生ず、是大法印にして涅槃海に印す。此くの如き海中能く三種の仏の清淨の身を生ず、此の三種の身は人天の福田なり」等云云。夫以れば、釈迦如来の一代、顯密・大小の二教、華嚴・真言等の諸宗の依經、往いて之を勸ふるに、或は十方台葉の毘盧遮那仏、大集雲集の諸仏如来、般若染淨の千仏示現、大日・金剛頂等の千二百尊、但其の近因近果を演説して其の遠の因果を顯はさず、速疾頓成之を説けども三・五の遠化を亡失し、化導の始終跡を削りて見えず。華嚴經・大日經等は一往之を見るに別円四蔵等に似たれども、再往之を勸ふれば蔵通二教に同じて未だ別円にも及ばず。本有の三因之無し、何を以てか仏の種子を定めん。而るに新訳の訳者等漢土に來入するの日、天台の一念三千の法門を見聞して、或は自らの所持の經々に添加し、或は天竺より受持するの由之を稱す。天台の学者等或は自宗に同ずるを悦び、或は遠きを貴びて近きを蔑り、或は旧を捨て、新を取り、魔心・愚心出來す。然りと雖も詮ずる所は一念三千の仏種に非ざれば、有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり。

問うて曰く、上の難未だ其の会通を聞かず如何。答へて曰く、無量義經に云はく「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」等云云。法華經に云はく「具足の道を聞かんと欲す」等云云。涅槃經に云はく「薩とは具足に名づく」等云云。竜樹菩薩の云はく「薩とは六なり」等云云。無依無得大乘四論玄義記に云はく「沙とは訳して六と云ふ、胡の法には六を以て具足の義と為すなり」と。吉蔵の疏に云はく「沙とは翻じて具足と為す」と。天台大師の云はく「薩とは梵語なり此には妙と翻ず」等云云。

私に会通を加へば本文を黷すが如し、爾りと雖も文の心は、釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与へたまふ。四大声聞の領解に云はく「無上宝聚、不求自得」云云。我等が己心の声聞界なり。「我が如く等しくして異なること無し、我が昔の所願の如き今は已に満足しぬ。一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」と。妙覺の釈尊は我等が血肉なり、因果の功徳は骨髓に非ずや。宝塔品に云はく「其れ能く此の經法を譲ること有らん者は、則ちこれ我及び多宝を供養するなり。乃至亦復諸の来たりたまへる化仏の諸の世界を莊嚴し光飾したまふ者を供養するなり」等云云。釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり、其の跡を継紹して其の功徳を受得す。「須臾も之を聞かば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟するを得」とは是なり。寿量品に云はく「然るに我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佉劫なり」等云云。我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顯の三身にして無始の古仏なり。經に云はく「我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず。復上の數に倍せり」等云云。我等が己心の菩薩等なり。地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷屬なり。例せば太公・周公旦等は周武の臣下、成王幼稚の眷屬。武内の大員は神功皇后の棟梁、仁徳王子の臣下なるが如し。上行・無辺行・淨行・安立行等は我等が己心の菩薩なり。妙樂大師云はく「当に知るべし身土は一念の三千なり。故に成道の時、此の本理に称ひて一身一念法界に遍し」等云云。

夫始め寂滅道場・華藏世界より沙羅林に終はるまで五十余年の間、華藏・密嚴・三變・四見等の三土四土は、皆成劫の上の無常の土に変化する所の方便・実報・寂光・安養・淨瑠璃・密嚴等なり。能變の教主涅槃に入りぬれば、所變の諸佛随つて滅尽す。土も又以て是くの如し。

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず未来にも生ぜず、所化以て同體なり。此即ち己心の三千具足、三種の世間なり。迹門十四品には未だ之を説かず、法華經の内に於ても時機未熟の故か。

此の本門の肝心、南無妙法蓮華經の五字に於ては佛猶文殊薬王等にも之を付屬したまはず、何に況んや其の已外をや。但地涌千界を召して八品を説いて之を付屬したまふ。其の本尊の爲體、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼佛・多宝佛、釈尊の脇土上行等の四菩薩、文殊・弥勒等は四菩薩の眷屬として末座に居し、迹化・他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く、十方の諸佛は大地の上に処したまふ。迹佛迹土を表する故なり。是くの如き本尊は在世五十余年に之無し、八年の間但八品に限る。正像二千年の間は小乘の釈尊は迦葉・阿難を脇土と爲し、権大乘並びに涅槃・法華經の迹門等の釈尊は文殊・普賢等を以て脇土と爲す。此等の佛をば正像に造り画けども未だ寿量の佛有さず。末法に来入して始めて此の佛像出現せしむべきか。

問ふ、正像二千余年の間は四依の菩薩並びに人師等、余佛、小乘・権大乘・爾前・迹

門の釈尊等の寺塔を建立すれども、本門寿量品の本尊並びに四大菩薩をば三国の王臣俱ともに未だ之を崇重せざる由之を申す。此の事粗之を聞くと雖も前代未聞の故に耳目を驚動きょうどうし心意を迷惑す。請ふ、重ねて之を説け、委細に之を聞かん。

答へて曰く、法華經一部八卷二十八品、進んでは前四味、退いては涅槃經等の一代の諸經、総じて之を括るに但一經なり。始め寂滅道場より終はり般若經に至るまでは序分なり、無量義經・法華經・普賢經の十卷は正宗なり、涅槃經等は流通分なり。

正宗十巻の中に於て亦序正流通有り。無量義經並びに序品は序分なり、方便品より分別功德品の十九行の偈に至るまでの十五品半は正宗分なり、分別功德品の現在の四信より普賢經に至るまでの十一品半と一卷は流通分なり。

又法華經等の十巻に於ても二經有り。各序正流通を具するなり。無量義經と序品は序分なり、方便品より人記品に至るまでの八品は正宗分なり、法師品より安樂行品に至るまでの五品は流通分なり。其の教主を論ずれば始成正覺の仏、本無今有の百界千如を説いて已今当に超過せる隨自意・難信難解の正法なり。過去の結縁を尋ぬれば大通十六の時仏果の下種を下し、進んでは華嚴經等の前四味を以て助縁と為して大通の種子を覺知せしむ。此は仏の本意に非ず、但毒発等の一分なり。二乗・凡夫等は前四味を縁として、漸々に法華に来至して種子を顕はし、開顯を遂ぐるの機是なり。又在世に於て始めて八品を聞く人天等、或は一句一偈等を聞いて下種と為し、或は熟し或は脱し、或は普賢・涅槃等に至り、或は正像末等に小権等を以て縁と為して法華に入る。例せば在世の前四味の者の如し。

又本門十四品の一經に序正流通有り。涌出品の半品を序分と為し、寿量品と前後の二半と此を正宗と為す、其の余は流通分なり。其の教主を論ずれば始成正覺の釈尊には非ず。所説の法門も亦天地の如し。十界久遠の上に国土世間既に顯はれ一念三千殆ど竹膜を隔つ。又迹門並びに前四味・無量義經・涅槃經等の三説は悉く隨他意・易信易解、本門は三説の外の難信難解・隨自意なり。

又本門に於ても序正流通有り。過去大通仏の法華經より乃至現在の華嚴經、乃至迹門十四品・涅槃經等の一代五十余年の諸經・十方三世諸仏の微塵の經々は皆寿量の序分なり。一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名づく。其の機を論ずれば徳薄垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獸に同ずるなり。爾前・迹門の円教すら尚仏因に非ず、何に況んや大日經等の諸小乗經をや。何に況んや華嚴・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや。与へて之を論ずれば前三教を出でず、奪つて之を云へば蔵通に同ず。設ひ法は甚深と稱すとも未だ種熟脱を論ぜず、還つて灰断に同じ、化の始終無しとは是なり。譬へば王女たりと雖も畜種を懷妊すれば其の子尚旃陀羅に劣れるが如し。此等は且く之を闍く。

迹門十四品の正宗の八品は一往之を見るに、二乗を以て正と為し、菩薩・凡夫を以て傍と為す。再往之を勸ふれば、凡夫正像末を以て正と為す。正像末の三時の中にも



末法の始めを以て正が中の正と為す。問うて曰く、其の証如何。答へて曰く、法師品に云はく「而も此の経は如来の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」と。宝塔品に云はく「法をして久住せしむ。乃至来たれる所の化仏当に此の意を知るべし」等と。勸持・安楽等之を見るべし。迹門すら是くの如し。

本門を以て之を論ずれば、一向に末法の初めを以て正機と為す。所謂一往之を見る時は久種を以て下種と為し、大通・前四味・迹門を熟と為して、本門に至って等妙に登らしむ。再往之を見れば迹門には似ず、本門は序正流通俱に末法の始めを以て詮と為す。在世の本門と末法の初めは一同に純円なり。但し彼は脱、此は種なり。彼は一品二半、此は但題目の五字なり。

問うて曰く、其の証文如何。答へて云はく、涌出品に云はく「爾の時に他方の国土の諸の来たれる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたる大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言さく、世尊若し我等に、仏の滅後に於て娑婆世界に在って、勤加精進して是の經典を護持し読誦し書写し供養せんことを聴したまはゞ、当に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし。爾の時に仏、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまはく、止みね善男子、汝等が此の経を護持せんことを須ひじ」等云云。法師より已下の五品の経文、前後水火なり。宝塔品の末に云はく「大音声を以て普く四衆に告げたまはく、誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華経を説かんものなる」等云云。設ひ教主一仏たりと雖も之を奨勸したまはゞ、薬王等の大菩薩・梵帝・日月・四天等は之を重んずべき処に、多宝仏・十方の諸仏、客仏と為って之を諫曉したまふ。諸の菩薩等は此の慇懃の付嘱を聞いて「我不愛身命」の誓言を立つ。此等は偏に仏意に叶はんが為なり。而るに須臾の間に仏語相違して、過八恒沙の此の土の弘経を制止したまふ。進退惟谷まり凡智及ばず。天台智者大師、前三後三の六積を作りて之を会したまへり。所詮迹化・他方の大菩薩等に我が内証の寿量品を以て授与すべからず。末法の初めは謗法の国にして悪機なる故に之を止めて、地涌千界の大菩薩を召して寿量品の肝心たる妙法蓮華経の五字を以て閻浮の衆生に授与せしめたまふ。又迹化の大衆は釈尊の初発心の弟子等に非ざるが故なり。天台大師の云はく「是我が弟子なり応に我が法を弘むべし」と。妙楽の云はく「子、父の法を弘む世界の益有り」と。輔正記に云はく「法是久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」等云云。

又弥勒菩薩疑請して云はく、経に云はく「我等は復仏の随宜の所説、仏所出の言、未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は皆悉く通達したまへりと信ずと雖も、然も諸の新発意の菩薩、仏の滅後に於て若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因縁を起こさん。唯然なり世尊、願はくは為に解説して、我等が疑ひを除きたまへ。及び未来世の諸の善男子此の事を聞き已はりなば、亦疑ひを生ぜじ」等云云。文の意は寿量の法門は滅後の為に之を請ずるなり。

寿量品に云はく「或は本心を失へる、或は失はざる者あり。乃至心を失はざる者は、

此の良薬の色香俱に好きを見て、即便之を服するに病 尽 く除こり癒えぬ」等云云。久遠下種・大通結縁、乃至前四味・迹門等の一切の菩薩・二乗・人天等の本門に於て得道する是なり。經に云はく「余の心を失へる者は、其の父の来たれるを見て、亦歡喜し、問訊して病を治せんことを求むと雖も、然も其の薬を与ふるに、而も肯へて服せず。所以は何。毒氣深く入って、本心を失へるが故に、此の好き色香ある薬に於て、美からずと謂へり。乃至我今当に方便を設けて、此の薬を服せしむべし。乃至是の好き良薬を今留めて此に在く、汝取って服すべし。差えじと憂ふること勿れと。是の教へを作し已はって復他国に至り、使ひを遣はして還って告ぐ」等云云。分別功德品に云はく「惡世末法の時」等云云。問うて曰く、此の經文の「遣使還告」は如何。答へて曰く、四依なり。四依に四類有り。小乗の四依は多分は正法の前の五百年に出現す。大乘の四依は多分は正法の後の五百年に出現す。三に迹門の四依は多分は像法一千年、少分は末法の初めなり。四に本門の四依は地涌千界、末法の始めに必ず出現すべし。今の「遣使還告」は地涌なり。「是好良薬」とは寿量品の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華經是なり。此の良薬をば仏猶迹化に授与したまはず。何に況んや他方をや。

神力品に云はく「爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩、地より涌出せる者、皆仏前に於て一心に合掌し、尊顔を瞻仰して仏に白して言さく、世尊、我等仏の滅後、世尊分身所在の国土、滅度の処に於て、当に広く此を説くべし」等云云。天台の云はく「但下方の發誓のみを見たり」等云云。道暹の云はく「付嘱とは此の經をば唯下方涌出の菩薩に付す。何が故に爾る、法是久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云。夫文殊師利菩薩は東方金色世界の不動仏の弟子、觀音は西方無量壽仏の弟子、藥王菩薩は日月淨明德仏の弟子、普賢菩薩は宝威仏の弟子なり。一往釈尊の行化を扶けんが為に娑婆世界に来入す。又爾前迹門の菩薩なり、本法所持の人に非ざれば末法の弘法に足らざる者か。經に云はく「爾の時に世尊乃至一切の衆の前に大神力を現じたまふ。広長舌を出だして上梵世に至らしめ、乃至十方世界衆の宝樹下の師子座上の諸仏も亦復是くの如く広長舌を出だしたまふ」等云云。夫、顯密二道・一切の大小乗經の中に、釈迦諸仏並び坐し舌相梵天に至る文之無し。阿彌陀經の広長舌相三千を覆ふは有名無実なり。般若經の舌相三千光を放ち般若を説きしも全く証明に非ず。此皆兼帶の故に久遠を覆相する故なり。是くの如き十神力を現じて地涌の菩薩に妙法の五字を囑累して云はく、經に云はく「爾の時に仏、上行等の菩薩大衆に告げたまはく、諸仏の神力は是くの如く無量無辺不可思議なり。若し我、是の神力を以て無量無辺百千万億阿僧祇劫に於て、囑累の爲の故に、此の經の功德を説かんに猶盡くすこと能はじ。要を以て之を言はゞ、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯説す」等云云。天台の云はく「爾時仏告上行より下は第三結要付屬なり」云云。伝教の云はく「又神力品に云はく、以要言之、如来

一切所有之法、乃至宣示顯説已上經文。明らかに知んぬ、果分の一切の所有の法、果分の一切の自在の神力、果分の一切の秘要の蔵、果分の一切の甚深の事、皆法華に於て宣示顯説するなり」等云云。此の十神力は妙法蓮華經の五字を以て、上行・安立行・淨行・無辺行等の四大菩薩に授与したまふなり。前の五神力は在世の為、後の五神力は滅後の為なり。爾りと雖も再往之を論ずれば一向に滅後の為なり。故に次下の文に云はく「仏滅度の後に能く是の經を持たんを以ての故に、諸仏皆歡喜して無量の神力を現じたまふ」等云云。次下の囑累品に云はく「爾の時に釈迦牟尼仏、法座より起つて大神力を現じたまふ。右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で乃至今以て汝等に付囑す」等云云。地涌の菩薩を以て頭と為して、迹化・他方乃至梵・釈・四天等に此の經を囑累したまふ。「十方より來たれる諸の分身の仏、各本土に還りたまふ。乃至多宝仏の塔還つて故の如くしたまふべし」等云云。藥王品已下乃至涅槃經等は、地涌の菩薩去り了つて、迹化の衆・他方の菩薩等の為に重ねて之を付囑したまふ。拈捨遺囑是なり。

疑つて云はく、正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此の經を流通するや。答へて曰く、爾らず。驚いて云はく、法華經並びに本門は仏の滅後を以て本と為して先づ地涌千界に之を授与す、何ぞ正像に出現して此の經を弘通せざるや。答へて云はく、宣べず。重ねて問うて云はく、如何。答ふ、之を宣べず。又重ねて問ふ、如何。答へて曰く、之を宣ぶれば一切世間の諸人、威音王仏の末法の如く、又我が弟子の中にも粗之を説かば皆誹謗を為すべし、黙止せんのみ。求めて云はく、説かずんば汝慳貪に墮せん。答へて曰く、進退惟谷まれり。試みに粗之を説かん。法師品に云はく「況んや滅度の後をや」と。壽量品に云はく「今留めて此に在く」と。分別功德品に云はく「惡世末法の時」と。藥王品に云はく「後五百歲閻浮提に於て広宣流布せん」と。涅槃經に云はく「譬へば七子あり。父母平等ならざるに非ざれども、然も病者に於て心則ち偏に重きが如し」等云云。已前の明鏡を以て仏意を推知するに、仏の出世は靈山八年の諸人の為に非ず、正像末の人の為なり。又正像二千年の人の為に非ず、末法の始め予が如き者の為なり。「然於病者」と云ふは、滅後法華經誹謗の者を指すなり。「今留在此」とは「此の好き色香ある味に於て美からずと謂ふ」の者を指すなり。

地涌千界正像に出でざるは、正法一千年の間は小乘・權大乘なり、機時共に之無し。四依の大士小權を以て縁と為して在世の下種之を脱せしむ。謗多くして熟益を破るべき故に之を説かず、例せば在世の前四味の機根の如し。像法の中末に觀音・藥王、南岳・天台等と示現し出現して、迹門を以て面と為し本門を以て裏と為して、百界千如、一念三千其の義を尽くせり。但理具を論じて事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊、未だ広く之を行ぜず。所詮円機有つて円時無き故なり。

今末法の初め、小を以て大を打ち權を以て実を破し、東西共に之を失し天地顛倒せり。迹化の四依は隠れて現前せず、諸天其の國を棄てて之を守護せず。此の時地涌の菩薩始め

て世に出現し、但妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ。「謗に因って悪に墮つは、必ず因って益を得」とは是なり。我が弟子之を惟へ、地涌千界は教主釈尊の初發心の弟子なり。寂滅道場にも来たらず双林最後にも訪はず、不孝の失之有り。迹門の十四品にも来たらず本門の六品には座を立ち、但八品の間に来還せり。是くの如き高貴の大菩薩、三仏に約束して之を受持す。末法の初めに出でたまはざるべきか。当に知るべし、此の四菩薩、折伏を現する時は賢王と成って愚王を誡責し、撰受を行ずる時は僧と成って正法を弘持す。

問うて曰く、仏の記文は云何。答へて曰く「後五百歳閻浮提に於て広宣流布せん」と。天台大師記して云はく「後五百歳遠く妙道に沾はん」と。妙樂記して云はく「末法の初め冥利無きにあらず」と。伝教大師云はく「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り」等云云。「末法太だ近きに有り」の釈は、我が時は正時に非ずと云ふ意なり。伝教大師日本にして末法の始めを記して云はく「代を語れば像の終はり末の初め、地を尋めれば唐の東・羯の西、人を原めれば則ち五濁の生・鬪争の時なり。經に云はく、猶多怨嫉況滅度後と。此の言良に以有るなり」と。此の釈に「鬪争の時」云云、今の自界叛逆・西海侵逼の二難を指すなり。此の時地涌千界出現して、本門の釈尊を脇土と為す一閻浮提第一の本尊、此の国に立つべし。月支・震旦に未だ此の本尊有さず。日本国の上宮、四天王寺を建立すれども未だ時来たらざれば、阿弥陀・他方を以て本尊と為す。聖武天皇、東大寺を建立す、華嚴經の教主なり、未だ法華經の実義を顕はさず。伝教大師粗法華經の実義を顯示す。然りと雖も時未だ来たらざるの故に、東方の鷲王を建立して本門の四菩薩を顕はさず。所詮地涌千界の為に此を譲り与へたまふ故なり。此の菩薩仏勅を蒙りて近く大地の下に在り。正像に未だ出現せず、末法にも又出で来たりたまはずば大妄語の大士なり。三仏の未来記も亦泡沫に同じ。此を以て之を惟ふに、正像に無き大地震・大彗星等出来ず。此等は金翅鳥・修羅・竜神等の動変に非ず、偏に四大菩薩を出現せしむべき先兆なるか。天台の云はく「雨の猛きを見て竜の大なるを知り、花の盛んなるを見て池の深きを知る」等云云。妙樂の云はく「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云。天晴れぬれば地明らかなり、法華を識る者は世法を得べきか。

一念三千を識らざる者には仏大慈悲を起こし、五字の内に此の珠を裏み、末代幼稚の頸に懸けさしめたまふ。四大菩薩の此の人を守護したまはんこと、太公・周公の文王を撰扶し、四皓が恵帝に侍奉せしに異ならざる者なり。

文永十年大藏西卯月二十五日

日蓮之を註す